

教務だより

2015年8月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

「理解してから、理解される」

茗溪塾塾長 宇野 雅春

夏期講習の前に、昨年相次いで逝去した義父と義母の法事がありました。法事後、義父母が最後の20年余を過ごした福島の家のと片づけを手伝いました。もともと九州出身の義父母が、長男の住む福島市に引っ越したのがかれこれ20年以上前のこと。それ以来、福島にも何度もきましたが、4年前の震災の時以降は義父母とも急速に体力も衰え、昨年義母がなくなった後は、義父の衰えもひどくなり、昨年末は千葉の病院でその生涯を閉じました。

昔気質の厳しいおじいちゃん、いくつかの病に見舞われながらも毅然としていました。

肺炎を患って入院してからは、生死の境を行き来する日々、何度も危篤状態を繰り返しながらも最後まで生きようと長く持ちこたえました。

後片付けをしていて、捨てようと思っていた書類の中から、義父の日記がでてきました。2007年にパソコンの練習にかかれたもので、ほぼ1年分が、ワープロで打ってありました。

冒頭に、8歳の頃、母親を亡くした時のことが書いてありました。初めて聞く話で、片づけをしながら、子供たち一同軽い驚きを感じました。そこには、母の死んだ直後、父と義父と義父の兄とが海で船に乗り、投げ網打ちをした時のことが書いてありました。

「夜空に大きな満月が煌々と輝き、魚はあまり取れなかった…」八代海に浮かぶ水島の風景…義父が生前最後に描いた絵のことを思い出しました。濃い夕日と暗く浮かぶ島の絵がそれまでの華やかな感じの絵とは全く違う暗い色彩を帯びていたことをその時思い出しました。何の説明もなかったのに、福島市の展覧会に見に行った時も、「どこの島だろう？」と思っただけでした。なんで島なのか…大きな塊が中央の風景に立ちはだかつて見えました。

日記の中には、8歳の子供ながらに自分の父が、「母も生きていてこの風景と一緒に見ることができたら…」とつぶやいたことを、父親の悲しみとして受け止めた思いとして書いてありました。ずいぶん前に他界した私の実の父も、父親を幼少で亡くしていたことを思い出しました。もしかしたら私の父もそのことを最後まで抱えて生きていたのかもしれないと思ったのです。

私たちがこれまでただひたすら甘えてきた「親」という存在に、実は少年時代がありその時受けた大きな衝撃を生涯心に持ち続けて生きてきていたということに改めて思いあたりました。

子供は意外と親の本当のことは、知らないままなのかもしれません。頑固一徹の義父でしたから、ある意味では子供たちからは煙たがられていたようにも思えます。

一年間描き続けられている日記には、日常の些細なことまでが細やかにつづられていて、ところどころに家族への感謝の言葉がありました。晩年は、胃を摘出したこともあり、家族にはわがままに映っていたようです。日記を見ると家族への思いの強さが感じられました。介護に追われた子供たちからすると、そういう気持ちだったならもっと優しくできた……という印象です。

私たちは常に「理解される」ことばかり考えがちです。言われたひとことや、「わかってくれない」ということだけで、単純に家族や友人との関係を悪化させることがあります。

「7つの習慣」では、「WIN・WIN」の次は「理解してから、理解される」です。相手を理解するということはとても難しいこと。でも、わかってもらいたければまず先に相手を理解するということ。自分の親たちのことを考えると後悔することが山のようにあります。

「理解する」という努力をしてこなかったせいかもしれません。夏、頑張ってWinWinを獲得したら、次は「理解してから理解される」にチャレンジしてみませんか？

自分を取り巻くコミュニケーションが、より深くより豊かなものになるはずです。